



No. 12

ボストンで考えたこと、
日本に戻って考えていること

東京大学保健・健康推進本部助教
東京大学卓越研究員

平池 勇雄

■はじめに

2019年4月から約2年間にわたり、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストンに位置するダナ・ファーマーがん研究所／ハーバード大学のBruce M. Spiegelman研究室に留学する機会がありましたので、その経験を共有させていただきます。

私は2010年に東京大学医学部医学科を卒業し、臨床研修を経て母校の東京大学大学院医学系研究科代謝・栄養病態学分野 門脇孝教授(現・虎の門病院院長)のもとで褐色脂肪細胞の分化を規定する転写制御機構やクロマチン制御機構の研究^{1,2)}に取り組んできました。Bruce M. Spiegelman先生は脂肪細胞のマスター転写因子PPAR γ の同定や、液性因子を分泌する「内分泌器官としての脂肪組織」という概念に結実する一連の研究を筆頭に、過去30年以上にわたって脂肪細胞の生物学を牽引してきた研究者であり、特に研究テーマの設定において彼の考え方に触れることは貴重な学びであったと思います。しかしそれ以上に、「母国から遠く離れて不安定な立場で呻吟する、何者でもない、何も持たない脆弱な人間」としての自分を経験することがこの留学で得た洞察の最大の源泉でした。留学の後半は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)パンデミックの直撃を受けて研究室が長期にわたって閉鎖され、基礎研究は完全に頓挫しましたが、その前後に得た新しい出会いや再会がまったく新しいプロジェクトに結実し、何とか論文を出すこと

ができました³⁾。

私の留学は当初の予定や期待とはまったく違うものになりましたが、かといって無駄ではなかったと思いますし、一定の犠牲と引き換えに一定の収穫がありました。いわゆる“transformative experience”であったことは間違いありません。私の経験が、若い方々にとって何かの参考になればと思います。

■留学するまでの経緯

学生時代の私はそのころ理化学研究所で研究室を主宰されていた上田泰己先生(現・東京大学大学院医学系研究科システムズ薬理学分野教授)に憧れて基礎研究に興味をもち、「一因子の挙動に還元することのできない、複数の因子の挙動を同時に考えてはじめて理解できるような現象の研究」に取り組んでみたいと思っていました。一方で臨床の仕事もしてみたいし、さらに人生のどこかで一度は海外で暮らしてみたいとも強く希望していました。米国で臨床医として働くために必要な資格であるECFMG certificateを取るための準備をしつつ、面白い論文を探して読んでみたり、興味をもった研究室へ見学に行ってみたり、あるいは医師出身で弁護士や経営コンサルティング、投資銀行、医系技官などの道で活躍されている方に会いに行ったりして過ごしていたと記憶しています。

1年次研修医の終わりごろにあたる2011年3月には、